# ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾３０
福島工業高等専門学校
編集　図書委員会　ビブリア編集部
平成１１年７月１５日

福島高専図書館報　第８７号

## 巻　頭　言

### 創造力を養う

バブル経済が崩壊して以来、超氷河期と呼ばれる厳しい就職戦線がつづいているが、今年は更に加速した感がある。求人会社数も減少し、就職試験の選考も厳しくなっている。

この度、ある学生がある大企業の就職試験に挑戦した。彼は学業成績は良好で理解力もあり、部活動においても主力選手として活躍し下級生への指導力も優れ、性格も明朗で積極性もある申し分のない学生である。受験の結果は、並みいる大学院生のなかに混じって第３次面接試験まで進んだが、惜しくも合格は成らなかった。　（内定者の中で他高専生１名あり。）以前の状況であれば合格したであろうと思われるが、なぜ合格にいたらなかったかについて彼の話から推測すると、専門科目についてどのくらい理解しているかということより、むしろその中のひとつのことにいかに深く考え、取り組んだかがポイントになっているように思われる。　かつての企業では基礎学力があり人物がしっかりしていれば、企業内教育で十分戦力化することが可能であったが、現在はその余裕がなく、即戦力として現場のチームの一員としてやっていける人材を求めている。そのためには工学的知識を具体的な成果に結びつける方法について訓練しておく必要がある。卒業研究においてはある程度行われることではあるが、就職試験の時期が早くなってきている今、５年生になってからでは遅きに失するわけで、専門科目を履修中の４年生のうちから専門に広い関心をもち、自分で興味のあることがらを見出し、それを起点に創造力を養う訓練が大切になってくる。創造力の養成には、異なる分野の知識を有機的に繋げる訓練が必要である。

まずは自分で興味のあることがらについて検索を行い、専門書を探し当て基礎的知識を習得することから始まる。多くのことは図書館にある専門書で事足りると思われるが、最新情報については雑誌コーナーにある学会誌か専門の月刊誌が有用である。更にインターネットを利用すればかなりの情報を習得することが可能である。そのためにはあくまで個人レベルにおいて目的意識をしっかりと持ち、それを実行する意志の力を必要とする。
精神が怠惰であれば興味をもった対象ですら目標にはなり得ない。ある程度多忙であるという環境のもとに緊張した精神状態を持続していく必要があろう。

＜ 建設環境工学科　　佐藤恭輔＞

目次

巻頭言（佐藤 恭輔）　……　１
新任の先生方の「私の薦める一冊」　……　２
学生による「私の薦める一冊」　……　３
図書館便り　……１０
お知らせ　……１１
感想文等募集のお知らせ　……１２

# 新任の先生方の「私の薦める一冊」

＜物質工学科教官　押手 茂克＞

「新編　銀河鉄道の夜」
「注文の多い料理店」
宮沢賢治著、新潮文庫　定価400円

最初、簡単で楽しい化学の本を学生に推薦した方が良いと考えました。しかし、就職する前にほとんど人にあげてしまい、専門書しか残っていません。難しすぎて読んでもらえないかもしれませんので、皆さんと同じ学生時代に読んだ本を推薦します。

本の題名になっている「銀河鉄道の夜」、「注文の多い料理店」は、非常に有名な文章です。しかし、本を読んだことある人は少ないのではないかと思います。本の中には、その他に「よだかの星」、「セロ弾きのゴーシュ」、「土神ときつね」などが含まれています。本の内容は、有名でいまさら書く必要が無いこと、そして、書いてしまうと読む楽しみがなくなることから書きません。実際に、自分で読んでみて下さい。さらに、「風の又三郎」や「宮沢賢治詩集」も合わせて読んでみたら更に良いと思います。

もう一度読み返してみると、学生時代、注文の多い料理店は行きたくないと考えていましたが、現在自分はどうかと考えさせられました。この本を読むことで、皆さんの今まで忘れていた気持を思い出すのではないでしょうか。勉強の手を休めて、気分転換にこれらの本を読んでみたらよいのではないでしょうか。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科教官 松江 俊一＞

「貧しき人々」
ドストエフスキー著 木村浩訳 新潮社

この作品はドストエフスキーの処女作で、初老の男性と 若い女性との間にとりかわされる“手紙”形式で構成された中編小説です。
場所は革命前１９世紀中頃のロシアの首都ペテルブルグ。文面に描かれているのは、時代も環境もなにもかも違う今の私たちの暮らしからはとてもかけはなれた当時のロシアの生活描写。そして、筆舌に尽くし難い、お互いに限りなく貧しい身の上でありながらも、相手を思いやる心と、貧しいながらも目前の些細な自然の変化に喜びを見い出す清らかな心。

この本を始めて読んだ１７歳の時以来、２０余年を経過した今でも私に時々読ませようとする何かをこの本は持っています。私たちがどこかに忘れてきてしまったものが、この中に描かれているような気がしてなりません。
「世の中には二種類の人間がいる。ドストエフスキーを知っている人と知らない人。」と言ったのは作家の椎名麟三でした。ためしに一度読んでみませんか？

ドストエフスキーの難解な作品群の中にあって、この作品は読みやすい文体で書かれています。原書で読んでみたい人がいたら、とことん付き合いますよ。

＜一般教科教官　坂内　昌徳＞

「言語学のすすめ」と呼べる一冊
"The Language Instinct" (1994)
Steven Pinker著 Penguin Books

学生のみなさんに薦める本といっても、日頃から文学作品など忙しいふりをして読んでいませんし、言語学の専門書などは到底人に薦める訳にもいきません。でもこの場を借りてちょっとだけ言語学の世界を知ってもらうのはどうでしょうか。(反則でしょうか？)
1994年にペーパーバック版が発売され、世界中でベストセラーになったPinkerの"The Language Instinct"は言葉に関して我々一般の人間が持つ漠然としたアイデアに科学的な視点から疑問を投げかけ、読者を壮大な人間言語の世界に誘ってくれる良書です。
この前授業中にあることから日本語の話になり、「日本語をどうすれば話せるかなんて人に教わって出来るようになった人はいないでしょう。」と言うと、ある学生が、
「でも国語の時間などでやります。」と反論してきました。国語の時間でやるのは「日本語をどのように正しく（あるいは美しく、適切に）使うか」で、それを習わないと日本語で話が出来ないわけではありません。日本で生まれ育った人は日本語ができるのが当たり前です。しかしどうして我々はこうして習いもしない言葉を「当たり前に」
駆使し、複雑なコミュニケーションを行うことが出来るのでしょうか。不思議なことです。最近日本に滞在ないしは永住している日本語を母国語としない人達がテレビに出演することがよくあります。流暢な日本語だと感心していると、時々「なんか変」な時がありますね。これも我々は日本人だから「当たり前」なんでしょうか。でも、そういういわゆる「誤りのある日本語」を以前に人に聞かされたことも、「これは文法的な文ではないんだ。」と教わったこともないですよね。なぜ我々はこういう直感を持つのでしょうか。
Pinkerによれば、言語(のある部分)は人間が生まれながらに持っているもので、人間が現在まで生き残って進化を遂げてきたのは言語を持ったからで、それはちょうど人間が前肢を「手」として使えることと同じことだそうです。確かに使い方を教わって手が使えるようになったと言う人はいないでしょうね。
英語で書かれているので薦めるにはやや気がひけますが、この本は「超」のつくほどベストセラーになったので、ひょっとしたら日本語訳が出ているかもしれません。またこれで興味を持ったら身の回りの日本語や英語をとりまくいろいろな現象について「でもなんで？」と考えてみては如何でしょうか。

## 学生による「私の薦める一冊」

＜機械工学科１年　大竹 伸幸＞

「小さなことでくよくよするな」
リチャード・カールリン著
サンマーク出版

日常、私達が生活していくうえで起こるさまざまなトラブル。例えばレポートが間に合わなかったり、友達とけんかしたり。
そんなことでいちいち悩んだり、腹をたてたりしてその日一日を嫌な気分で終らせないための方法がこの本には書いてあります。
具体的な方法として書いてあるのが「見方を変える」ということです。腹立たしいことも少し考え方を変えるだけで全然平気になります。
一つ例を挙げると、自分に嫌な事をしてくる人がいたら、その人はその事を通して自分に我慢を教えていると思ってみる。そうすると、その人が嫌ではなくなるというものです。
このように、この本では見方を変えるということを教えてくれます。見方を変えれば、腹立たしいこともそうとは感じなくなります。そうすれば、その日一日を楽しく過ごすことができます。
みなさんもこの本を読んで楽しい人生の過ごし方を学んでみてはどうでしょうか。

＜電気工学科１年　塩山 裕樹＞

「ＴＵＧＵＭＩ」
吉本ばなな著　中央公論社

「確かにつぐみは、いやな女の子だった」
この書き出しで始まる吉本ばなな作、中央公論社刊の「ＴＵＧＵＭＩ」を紹介します。
この本の内容は、主人公のまりあとそのいとこで病弱で生意気な美少女つぐみが、共に育った海辺の小さな町を舞台にふるさとでの最後の一夏を、恭一という少年と共に過ごすという物語です。
はじめてこの本を読んだ時、「変な感じの本だな。」と思いました。それはなぜかというと、この本の中に出てくるつぐみのセリフの中でこんなものがあるからです。
「食うものが本当になくなった時、あたしは平気でポチを殺して食えるようになりたい。」
このセリフを読んだ時、「確かに嫌な子」と思いましたが、
「本当に平然として『ポチはうまかった。』と言って笑えるような奴になりたい。」
というセリフで、このセリフはどういう意味で言ったのだろう、感謝しているのだろうか、と思ったほどです。
本当につぐみは嫌な子かもしれません。しかし、つぐみの一つ一つのセリフには悲しみや楽しみ、苦しみなど、自分自身を考えさせられるものがあります。
優しくなりたい人、ぜひお薦めします。

＜建設環境工学科１年　木下 康之＞

「神々の指紋」
グラハム＝ハンコック著　大地 舜訳
翔泳社

この本は英国で発売されるや、二週間でベストセラーのトップに躍り出た名作である。とても有名な本なので一度目にしたり読んだりした人もいるだろう。
この本の著者グラハム＝ハンコックは元「エコノミスト」誌の東アフリカ特派員だった。５年間にわたる世界各地での調査を経て、この「神々の指紋」を執筆する。
この作品は著者が1513年に描かれた奇妙な地図と出会ったことから始まる。その地図には1818年にはじめて発見された南極大陸が描かれていたのである。しかも、1949年にはじめて明らかになったクイーンモードランド地方をはじめとする氷床の下の地形まで正確に描かれていた。中南米各地の遺跡とそこに伝わる伝説を調べるうちに人類文明の発祥の謎を解き明かす事実が明らかになる。
著者の発見が本当ならば、人類の歴史がくつがえされることになる。興味のある人は一度読むことをお薦めする。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科１年　草野 彩＞

「グラスウールの城」
辻 仁成著　　新潮文庫

レコード会社の制作ディレクター、それがこの文章の主人公である。彼には時折(特に仕事から帰ってきた夜中)幻聴が聞こえる。それは家具が移動する音だったり、銃声だったり。そして最も頻繁に現れるのは仕事柄、楽器の音----エレキギターの歪みきった和音、ミュートの効いていないスネアドラムの音----。
しかし、初めて幻聴を体験してから今日まで、とくに日常生活に支障をきたすこともなく、幻聴とはうまく共存してきてしまった。そのせいか、今さら医者に行く気にもならない----。
著者は、自分達の社会や世界にうまくなじめないでいる人間の感覚の歪みみたいなモノを主人公の「幻聴」に例

えている。そう感じる。悩んでいるなどと言っている余裕など、この社会、世界ではもう残っていない。
主人公は万年睡眠欠乏状態の最中に、「変わり者」と評判の鹿島というエンジニアに出会う。鹿島は「音の神」「神の声」という言葉により自分が音を創り出すことに対する恐れを忘れないようにしている。そんな鹿島に導かれ、アナログ（レコード）とデジタル（ＣＤ）の差に驚き、そして、幻聴の源を意識しはじめる----。
辻仁成氏の作品は、最後辺りが良いと思う。（いや、別に全部良いと思うが特に最後辺りが。）もう一つ、文章が目の前に広がるように書かれるのも。私はこの「グラスウールの城」だけをお薦めしたくはない。辻仁成という人の作品を読んでいただきたいのだ。こんな意味不明な紹介を見るより、やはり、読んでいただきたい。辻仁成氏の文章全てをお薦めする。

＜機械工学科２年　伊藤 堯之＞

「老人と海」ヘミングウェイ著 新潮社

この本「老人と海」を読むきっかけとなったのは、僕が、クラスのビブリア原稿を書くことになって、友達から借りた本の中の一冊で、その中で一番僕が気に入った本だったからです。
この本の主人公のおじいさんは、長年漁師をやっているのにもかかわらず、貧乏であり、しかもここ八十四日も当たりがない。しかし、彼には長年の漁師の経験で得た技術をもっていた。
魚がとれなくなってから、八十五日目の日、彼はいつもどおり、朝暗いうちから、一人、小舟で漁に出た。いつもより遠く舟を運ばせながら、しかけを作って水中に沈ませた。彼のしかけは若手の漁師とは違い、自分の沈ませた位置にきっちりとしかけられている。その晩、彼のしかけに、彼の舟とは比べものにならないとても大きな魚がかかった。彼は、熟練の技術を使い、魚を網の中に入れることに成功した。しかし、魚はそんな事ではとらえることができなかった。ここから次の日の真夜中まで、一人の人間と一匹の魚の戦いが続いた。だが、最後には、おじいさんの長年の経験が魚の勢いに勝り、彼は、彼の舟とは比べものにならないとても大きな魚をとらえることができた。
しかし、岸に帰るまでが大変だった。この後、彼に起こった出来事とは？
この続きが知りたい人は自分で読んで下さい。
なお、この本は二年機械学級担任の高野先生も、お薦めの一冊だそうです。

＜電気工学科２年　佐藤 健二＞

「晩年」　太宰 治

「人生は短い。この本を読めば、あの本は読めないのである。」
とは、某書店のカバーに印刷されている言葉である。こんな安っぽい言葉にも、あるいは一片の真理が宿っているものなのかもしれない。結局のところ全ての作家の全ての作品を読むなどということは不可能だ。相当な読書家であっても、代表作しか読んだことのない作家に対して誤解が生じるのは仕方のないことだろう。
それでも敢えて、僕は言いたい。太宰という作家に対する、大衆の誤解についてである。太宰のことを、美しい小説を山ほど書いて勝手に自殺して死んでいった、芥川の出来損ないの様な作家だと認識している人間が、いかに多いことか。太宰文学の真価も解らずに文壇面している人間が、いかに多いことか.....。
いや、もう、愚痴はよします。君も何も言わずに、「晩年」を読んではくれませんか。嫌と言う程、思い知ることでしょう。この世界には、誰も追いつくことができない人間が、厳然たる才能というものが、実際に存在するということを。そして、追いつこうとする気力すら失わせる程の輝きを持つ天才が、過去に存在していたということを。

＜物質工学科２年　浜井 裕介＞

「軍師参謀」
小和田哲夫著 中央公論社

本書は、戦国時代を中心に活躍した軍師・参謀の歴史、本来の役割など、その存在の意味を解き明かす一冊である。また真田幸村、山本勘助、山中鹿介など名軍師と伝えられる武将らについても虚像を排した実像に迫っている。
特に、武田信玄に軍師として仕えたとされる山本勘助については興味深い内容になっている。山本勘助は、出生年や出生地などが明らかになっておらずその存在すら疑問視されている武将であるが、本書では、その出生年や出生地などについてさまざまな説を取り上げ、著者の考えを交え、検証している。
本書は、少しこの時代に対する知識がないと難しい内容になっているが、興味のある方は、一度読んでみるとよいでしょう。また、著者である小和田哲夫氏は戦国時代史を専門としており、他にも多くの著書があり、その洞察の深さにはいつも感心させられるのである。ここで紹介した本以外にも小和田氏の本を読むことをお薦めする。

＜建設環境工学科２年　西山 桂太＞

「車輪の下に」
ヘルマン＝ヘッセ著 秋山六郎兵衛訳
角川書店

この作品は、1906年に書かれたもので、作者自身の体験を元にして書かれています。話は主人公を取り巻く環境から始まり、主人公のハンス・ギーベンラートのことにつながっていきます。
彼は、苦労の末に神学校に入学するが、そこでの生活に耐えきれなくなり、逃げ出してしまう。精神的苦痛を抱えたまま自分の故郷に戻り、思い出の中に少年時代を再び経験していた。それから一人の少女に恋をするが、それも結局終わってしまい、そのことに対する腹立たしい苦痛に悩まされてしまう。その後に彼は川に落ちて溺死してしまうが、なぜ川に落ちたのかは三つの推測の形で書かれているだけで曖昧なものになっている。これがこの作品の大体の流れになっています。こんな感じの作品なので、ぜひ一度は目を通してみて下さい。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年 雲藤 孔明＞

「勇気をくれたこのひとこと」
ディスカバー21

「私の推す一冊」ということで、僕は「勇気をくれたこのひとこと」（ディスカバー21）をぜひ推薦したい。
「ひとりじめするのはもったいない。」と書かれている帯が目を引くこの本は、読書家たちから寄せられた三千もの「ひとこと」が文字という形をとったもので、様々な人々の感動を呼び、心を泣かせた。僕もその一人だ。
心が悴んでしまって、軽い人間不信に陥ったことがある。信頼の二文字が怖くて、とにかく意味もなく落ち込んでいた。そんな時にふと立ち寄った本屋でこの本が平積みされていた。なんとなく、だった。なんとなく手にとって読んでいた。そうしていたら、心が泣きだしてしまった。ああそうか、泣きたかったんだ。心を変にオブラートで包もうとするからこんなになったんだ。僕自身にひとことをくれる友達の存在に気が付いた。「そのままでいいじゃん。」それは僕に向けられた言葉ではないけれど、僕の心は嬉し涙を流した。
心にぽっと灯が灯った。みんなにほんの少し素直になろうと思った。
もしも今、心が泣きそうな人はぜひこの本を読んでひとことを感じてください。そして心の言い分を聞いてあげてください。

＜電気工学科３年　丹野 裕貴＞

「変身」フランツ＝カフカ著 角川文庫

今回紹介するこの「変身」は、フランツ＝カフカというあまり世間では知られていないような作家が著した一冊です。
このフランツ＝カフカは19世紀ごろユダヤ人の息子として生を受け、多くの作品を書いたが、そのほとんどの作品を未発表のまま捨て去ってしまった

というよくわからない人です。よってこの「変身」は世に出ている数少ない本の一つということになります。
肝腎の内容の方は、平凡なセールスマンのはずの主人公が朝起きると巨大な褐色の毒虫となっていたという、いたってシンプルで分かりやすいものです。まあ読者の方は分かりやすいかもしれませんが、毒虫となってしまった主人公の方は大変です。わけがわからないままに日常がはじまり、自分をとりまく環境、そして自分の立場、家族などに絶望してゆきます。なんといっても虫の体ですから気持ち悪いし、会社にもいけない、物も食べられない、家族はいきなりパニックにおちいってしまい、人の話をきかない上に暴行を加えようとする...などなど。まあ絶望する気持も分かるような気もしますけどね。
と、いった感じで進んでゆく物語、ただばらばらと流す感じで読んでみてはいかがでしょうか？幸い中編小説なのでページ数が少ないこともあり、飽きっぽい人にもお薦めできます。もし一回目を読み終えて、もう一度読んでみようかな...などと思った人は、今度は主人公の気持になって読んでみて下さい。今まで笑っていた現実が、笑えなくなるかもしれませんよ？

＜物質工学科３年　大友 博之＞

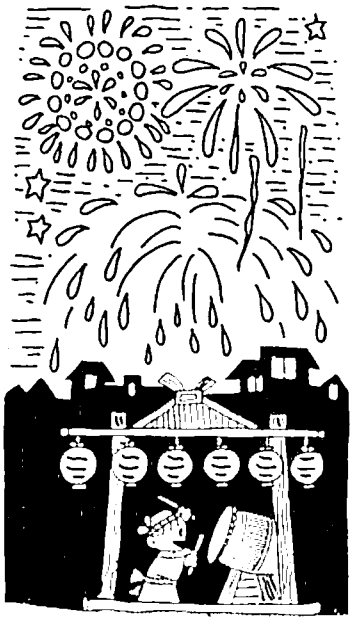
「ブギーポップ イン ザ ミラーパンドラ」　上遠野浩平著　電撃文庫刊

「僕達には未来が見える。」例えそれが何であっても....。みなさんはパンドラの箱という物を聞いたことがあるだろうか、神話で言われる、ありとあらゆる絶望を入れた箱の事である。今現在世界がこんなのも、パンドラさんというお方がこの箱をあけてくれたからということらしい。パンドラさんはあわてて箱を閉めにかかるが、そこには最後に希望が残っていた----。というのが通説である。が、実際に残ったのは最後の絶望。最後の絶望が箱に残ったことが、希望がある、と解釈された訳である。
今までの人間と、ほとんど酷似しているが、今の人間とはわずかに違う人間。一足先にわずかに進化してしまった人間。未来に出会う人間が見える。未来にかぐはずの臭いがかげる。未来に聞く言葉が話せる。未来に起こることの符号が体に浮かぶ。未来に見る物を絵に出来る。未来の感覚がわかる。今の人間とは違う、少し進化してしまった六人の少年少女。
パンドラの箱、最後の絶望は、予知。未来を知る事により、未来への夢と希望を失う、その絶望。最後の絶望を持った六人と、一人の少女が出会う物語。
「この世界がほしければ手にはいる。私を殺せば----。」（出会う少女のセリフ。）

＜建設環境工学科３年　佐藤 太一＞

「Beverly Hills,90210　Watcher's Bible」榊 ゆかり著 アスキー出版

ビバヒル好きの人必見!!のこの本。10年間続いているＢＨの不思議。ウォルシュ家の謎・ブレンダのその後・エピソードの矛盾点・撮影裏話などが詳しく書かれています。著者は、あの日本一ＢＨを知っている榊ゆかり氏。榊氏所有のＢＨグッズの写真も収録されています。これからＢＨを見てみようという方、最近見始めたけれど、誰が誰だかわからな～いというあなた、ずっと見ているけどもっと知りた～いというあなたにも、必見の一冊です。



＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科３年 高橋 康孝＞

「クリス・クロス～混沌の魔王」
高畑京一郎著 メディアワークス発行

この著者名に見覚えのある方はどのくらいいるのだろう？ 彼は「タイム・リープ」という映画の原作者。かつて「映画の脚本が上がったから意見を聞きたい」と送られてきた時に、自ら脚本一本まるごと書き上げて送った事があるという、なかなか面白い人だ。
さて、その「タイム・リープ」の設定は＜ほとんど現実の世界＞だった。この作品はどうかと言うと、＜ほとんど現実の世界を基板とした仮想現実ＲＰＧの中の話＞だ。前述の「タイム・リープ」ともほんの少しだが重なる部分もあったりするがそれはそれ。
「ダンジョントライアングル」
日本が総力を結集して造り上げたスパコン、「ギガント」で走らせたＲＰＧの名がそれだ。主人公は幸運にも「一般試写会」に当たった 256人のうちの一人。物語は彼の一人称で進んでいく。主人公は途中で出会った仲間たちとなんとか危機を乗り越えていく。だが彼らを待っていたのは華やかなエンディングではなく、身も凍るような恐怖だった。
交錯する現実と虚構の世界。二重の虚構。その見極めがなかなかに難しく、面白い。

＜機械工学科４年 松本 秀平＞

「すべてがＦになる」
森博嗣著 講談社文庫

「すべてがＦになる。」この本を手にし、最初に開いたページに示されていたフレーズだった。ＦになるのＦとは何か、フィニッシュ、フリー、フューチャー...。たった一言のフレーズが、一瞬で私の心を捕まえて離れていこうとしない。そんな感じを受けてついつい手にした本である。
事件は、遠く離れた小島の研究所でおこる。幼き頃にあった事件をきっかけに、人との関わりを避ける天才プログラマ、真賀田四季。彼女を中心に動くハイテク研究所、その彼女が完全なる密室で殺害される。ウェディングドレスをまとい両手両足を切断され、その死体を乗せ、密室の中を動きまわるロボット。そして「すべてがＦになる」のメッセージ、偶然島を訪れていた大学助教授、犀川と女子学生・西之園萌絵が、この不可思議な密室殺人に挑む。
私が今までに読んだ中にはない、新しい形の本格的ミステリー小説だった。読んでいけばいく程、時を忘れさせる程のめり込んでいく。気がつけば手に汗を握っている。この本はそんな気持にさせてくれる一冊といえるだろう。読んでいる人を魅了させる本とはこのような本をいうのではないだろうか。これからミステリー小説に手を出してみようと考えている人に推す一冊である。

＜電気工学科４年 斉藤 泉＞

「生活はアート」
パトリス＝ジュリアン著

この本は、パトリス＝ジュリアンという、ある陽気なフランス人のおじさんが書いた本です。彼は、毎日を楽しく、いきいきと暮らすことの天才です。彼はたくさんの小さな楽しいことを知っています。
パトリスは、この本を、生活をもっと楽しくしたい、もっと自分らしく暮らしたい、という人たちのために書き上げました。ですから中には、生活をより楽しく暮らすための、様々なアイディアが詰め込まれています。
たくさんのアイディアの根底にあるものは、「生活はアート」という考え方です。くり返される日常を生きる時、私達は実にたくさんの夢をみます。自分の夢、行ってみたいところ、食べてみたいもの、誰にでもいくつもの「したい」ことがあり、私達はそれを生活の中で実現していくアーティストです。
彼は本の最後をこうしめくくっています。「生活はつまらないルーティン・ワークではありません。生活とはインスピレーションに正直に、夢だったものを現実にしてゆけるワークショップではないでしょうか。」
私は、自分が自分の生活をつまらなくしているな、と感じる時にこの本を読みます。暮らしを充実させるのは自分自身であるということを再認識するためです。
自分の人生を決断するのは私だけに許

された自由です。自分のやりたいことは、自分にしか分かりません。私達はみんな、生活のアーティストであり、毎日が自分の作品なのだと、パトリスは私に教えてくれました。

＜物質工学科４年　佐川 五月＞

「屍鬼」小野不由美著

これは、今私が読んでいる本です。読み終っていなくて申し訳ありません。作者は、小野不由美という人です。
さてこの物語は、といってもまだ読んでいる途中の身ですが、ある山奥の村が舞台でそこの村人が原因不明でどんどん死亡していくというものです。村人が沢山出てきてそれぞれの視点から書かれているので誰が誰か分からなくなりますが慣れるまでの辛抱です。
ところで、この本の題名である「屍鬼」とは、話の中でお坊さんが書いている小説の中に出てくる幽霊みたいなものです。幽霊といっても死体が意識を持って動き回るというものらしく「起き上がり」ともいうそうです。
この本は、上、下巻の二冊です。上巻の半分程は、村の立地やら多くの村人の性格やらをのみこむためにあるようなもので少し退屈ですが、そこを乗り越えればだんだん面白くなっていきます。
お坊さんの小説の中身と村人の死因はこれからのお楽しみです。私にとっては、ですけど。

＜建設環境工学科４年　相川 朋生＞

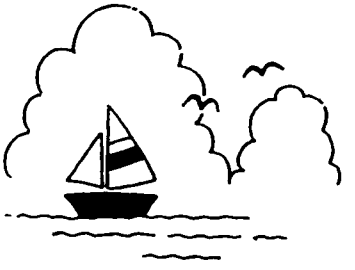
「空色勾玉」　萩原規子著　徳間書店

この作品は、後に「白鳥異伝」「薄紅天女」と続く勾玉三部作の第一作です。
古代の日本・豊葦原が舞台のこの物語は、神話を礎に綴られています。まだ輝（かぐ）の一族と闇（くら）の一族が覇権を争っていた頃の話----。
今年十五になった村娘の狭也は、櫂歌（かがい）を間近に控えたある晩に、ある夢をみます。六つの時から今まで、ずっと見続けている、自分を掠おうとする五匹の鬼の夢。そして、長い黒髪の不気味な巫女の夢。しかしその夢は現実となって狭也の前に現れます。彼らは自分たちを闇の一族だと告げ、輝に焦がれる狭也のことを闇の氏族の巫女姫だと語るのでした。「水の乙女」「大蛇の剣」、知らぬ言葉が狭也を追いつめ、終には憧れの輝の宮にその身を委ねます----輝の神の采女として。しかし輝の宮で狭也を待っていたのは、運命を大きく変える出会いでした。「風の若子」稚羽矢、そして何より「大蛇の剣」との邂逅は、狭矢を更なる激動の乱へと導くのでありました----。
たゆたう水面に映る稚羽矢、稚羽矢が狭矢に見せた松虫草の原。流麗な自然の中で繰り広げられるこの少年少女の物語は摩天楼の林中に住む私達にとって、きっと美しいほどのノスタルジアを感じさせてくれるでしょう。
（補足）この本を読みたくなった方は、市立図書館へ行くか、金を出して本屋に注文する、もしくは友達に借りて下さい。売ってません。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科４年 芳賀 敦子＞

「基本的人権の事件簿　憲法の世界」
棟居快行・赤坂正浩・松井茂記・笹田栄司・常本照樹・市川正人著　有斐閣選書

みなさんは「憲法」と聞いたら、かなりひいてしまうでしょう。しかし、憲法はわたしたちとわたしたちの生活に深く関わっています。
そしてそのことをきちんと知り、きちんと考えることは、国民の義務であるといえます。
そこでこの本を推薦します。この本は授業に使うものではなく、わたしの趣味で探し出したものです。わたしたち学生にも身近な事件とその裁判が詳しく説明されています。それに解説と質問がつくので、読者も一緒になって考えることができます。同じような著書の中でも特に読みやすく、憲法に興味がない人にもおススメです。もちろん、わたしのように憲法に興味がある人にとっても、まじめに学ぶことができると思います。



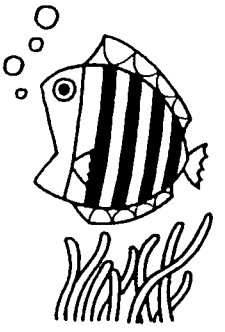
# 図書館便り

☆学年学科別図書帯出冊数（平成１０年４月～平成１１年３月）

| 学　年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 機械工学科 | １３ | ２０９ | ４５０ | ４７１ | １２０ | １２６３ |
| 電気工学科 | ２３ | ２９ | ２２９ | ５６２ | ２６３ | １１０６ |
| 物質工学科 | ３７ | ２３７ | ２６０ | | | １７５３ |
| 工業化学科 | | | | ９８８ | ２３１ | |
| 建設環境工学科 | ５９ | １３９ | ３７０ | １０９ | | ８３２ |
| 土木工学科 | | | | | １５５ | |
| ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科 | ５５ | ３８ | １５８ | ３２５ | ２６２ | ８３８ |
| 合　計 | １８７ | ６５２ | １４６７ | ２４５５ | １０３１ | ５７９２ |

☆図書貸し出し冊数ベスト１０（平成１０年４月～１１年３月）［学年は昨年度のもの］

| | | | |
|---|---|---|---|
| １ | 村山　英司 | （工業化学科４年） | ３１８冊 |
| ２ | 吉成　悦子 | （工業化学科４年） | ８１冊 |
| ３ | ロザリ | （電気工学科４年） | ７７冊 |
| ４ | 松橋　北斗 | （機械工学科２年） | ６４冊 |
| ５ | 服部　直明 | （工業化学科４年） | ６０冊 |
| ６ | 渡部　寛之 | （物質工学科２年） | ５５冊 |
| ７ | 齋藤　泉 | （電気工学科３年） | ５２冊 |
| ８ | 渡部　真規子 | （建設環境工学科３年） | ５０冊 |
| ９ | 加澤　英子 | （工業化学科４年） | ４８冊 |
| １０ | 赤津久美子 | （工業化学科４年） | ４６冊 |



# お知らせ

## ☆☆☆　臨時開館について　☆☆☆

○ 開館期間　7月21日（水）～7月30日（金）
8月17日（火）～夏季休業終了日まで。

ただし、土・日曜日は閉館とします。

○ 開館時間　午前の部　8時30分～12時00分まで。

午後の部　13時00分～17時00分まで。

※ 夏季休業期間中は「臨時開館日」を除き館内所蔵図書の点検及び整理のため閉館します。

## ☆☆☆　特別貸出について　☆☆☆

○貸出手続き　・・・・　7月12日（月）～ 夏季休業期間

○貸出限度冊数　・・・　5冊まで

○貸出期間　・・・・　夏季休業期間

## ☆☆☆　卒業研究生特別貸出について　☆☆☆

○卒業研究生は、所定の手続きを行えば、別枠として5冊の貸出が認められます。

## ☆☆☆　その他　☆☆☆

○購入希望図書がありましたら、最寄りの図書委員を通じて、あるいは、直接図書係に申し込んで下さい。

# 感想文等募集のお知らせ

今年度も、学生の皆さんに、より読書に親しんで頂くための一環として、恒例の「読書感想文等コンクール」を下記の要領で実施いたします。

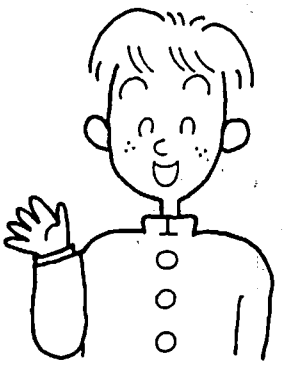
今回も、昨年度と同様

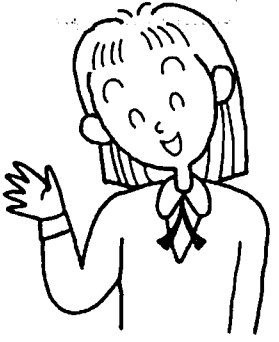
・従来通り読後の感想文でもいいし
・あるいは読んだ本の紹介文でもいいし
・読んだ本に対する評論文でもよい、というように自由にしました。

自分に合ったスタイルで、読んで感動した本について書いてもらいたいと思います。
ふるって参加して下さい。

記

| | |
|---|---|
| 1．形　式 | 1600字程度の読書感想文、本の紹介文、本に対する評論文を<br>テキスト文書、または手書きで提出すること。<br>（テキスト文書の場合はフロッピーを提出またはE-mailで提出する。） |
| 2．募集部門 | 以下の二部門で募集します。<br>・低学年の部（1～3年生対象）<br>・高学年の部（4、5年生対象） |
| 3．提出締切 | 平成11年 11月末日 |
| 4．賞　品 | 低学年、高学年の部とも1～3位まで図書券が贈られます。 |
| 5．その他 | ・感想文等は<br>*手書きの場合は、図書館事務室に提出すること。<br>*フロッピーの場合も、図書館事務室に提出すること。<br>*E-mailの場合はohtsuki@fukushima-nct.ac.jp 宛。<br><br>・それぞれの部門の第1位の感想文等は、次回発行のビブリアに掲載する予定です。<br><br>・応募は一人一編までとします。 |





## 平成１１年度図書委員会

図書館長　　阿部　妙子（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科）
副館長　（ビブリア担当）　大槻　正伸（電気工学科）

委員　佐藤　憲男（機械工学科）　　山本　敏和（電気工学科）
　　大澤　英一（工業化学科）　　堤　　隆　（建設環境工学科）
　　夏井　宏　（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科）　高橋　宏宣（一般教科）
　　岡部　久雄（庶務課長）　　鮫島　和弘（図書係長）
　　大谷　敦子（司書）　　山野辺憲子（図書係）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ５Ｍ 橋本 勝 | ５Ｅ*西山 和輝 | ５Ｃ 服部 直明 | ５建 磯上 幹夫 | ５コ 松本 智明 |
| ５Ｍ 松本 文一 | ５Ｅ*和田 健 | ５Ｃ 村山 英司 | ５建 金井 洋平 | ５コ 阿部 絵李華 |
| ４Ｍ*佐藤 朝範 | ４Ｅ 斉藤 泉 | ４物 菅野 千晶 | ４建 栗谷川 朋子 | ４コ 森田 千絵 |
| ４Ｍ*篠原 健一 | ４Ｅ 馬目 高志 | ４物 佐川 五月 | ４建 草野 秀明 | ４コ 山岸 幸 |
| ３Ｍ 橋本 辰也 | ３Ｅ 遠藤 隆樹 | ３物 田中 順子 | ３建 遠藤 光浩 | ３コ*高橋 康孝 |
| ３Ｍ 平田 祐護 | ３Ｅ 平賀 元博 | ３物 堀江 大心 | ３建 佐藤 太一 | ３コ*根笹 寿明 |
| ２Ｍ 大野 竜平 | ２Ｅ 佐藤 健二 | ２物 吉田 篤史 | ２建*片田 泰輔 | ２コ 本田 弘恵 |
| ２Ｍ 二本 松聡 | ２Ｅ 中野 兼輔 | ２物 渡邊 了介 | ２建*西山 桂太 | ２コ 緑川 里美 |
| １Ｍ 大竹 伸幸 | １Ｅ 宮城 敦吏 | １物*宮原 直俊 | １建 木下 康之 | １コ 草野 彩 |
| １Ｍ 長谷 川広司 | １Ｅ 白幡 和也 | １物*水野 和宏 | １建 佐藤 孝一 | １コ 村上 律子 |

＊はビブリア編集委員

編集後記

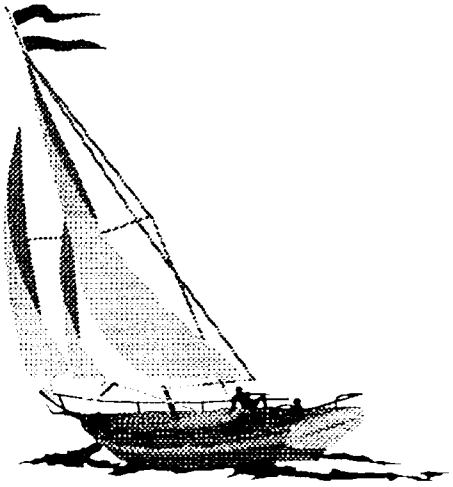
私が学生時代に微積分学を教わった先生ですごい人がいました。
授業で先生は、だいたいがじっと本の定理を見ている。しばらくじっと見ている。
仕方がないから我々学生もじっとそのところを読むしかない。しばらくして、先生が口を開く。
「いやー。これはすごい定理ですなあ。証明も見事です。さて、君たちは本を持っている。そして目がある。なによりも頭がある。だから読めば解ります。それでは次。」
という具合で、その先生は、高木貞治著「解析概論」という、分厚い本があるんですが、それを１年間で終わらせたんです。この調子なら、１年間でも相当の量の講義ができるはずですね。（しかし後で思うんですが、これって「講義」というんでしょうかねえ？）
これは確かにむちゃくちゃな講義のように見えるけれども、今考えると、他の講義に比べ、覚えているのはむしろこちらのむちゃくちゃな方の内容なんです。
いかに自分で読んでじっと考えることが大切か、ということではないでしょうか。

さて、また夏休みがやってきます。贅沢に時間を使っていい本を読める時期ですね。「あ、もうあとこれだけしか残っていない。」と残念がりながら読むようないい本に出会えると、その時期が充実して感じられる、というのは私だけではないはずです。
ぜひ、いい本に出会って下さい。そして、「感想文コンクール」に応募してほしいと思います。それでは充実したよい夏休みを過ごして下さい。

暑い夏、でも厚い、篤い、熱〜い運命的な出逢いがここにはある。
宿題やレポート、資格や就職・編入試験に役立つ図書なのか、
感動し、希望と生きる力を与えてくれる読物やビデオなのか、、
友情なのか、恋愛なのか、、たとえ架空の世界であっても、、、

# 福島高専図書館

きっと、素晴らしい豊かな時間があなたを待っている。
とにかく、クールで知的な空間で、一度きりのこの夏の青春に
我らが福島高専図書館で探してみよう。



with xxx　図書館長